論文審査要旨及び担当者
報告番号　甲　乙　第　　号　　氏名　大沼　由布

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部教授　松田　隆美
文学研究科委員、D.Phil.
副査　慶應義塾大学文学部教授　髙宮　利行
文学研究科委員
副査　ヴィクトリア大学英文学部准教授　イアン・マクラウド・ヒギンズ
Ph. D.　(Iain Macleod Higgins)

論文題目　'The Appropriation of Classical Literature in *Mandeville's Travels*'
（『マンデヴィルの旅行記』における古典文学の受容）

大沼由布君による博士号請求論文、'The Appropriation of Classical Literature in *Mandeville's Travels*'（『マンデヴィルの旅行記』における古典文学の受容）は、1357 年頃にフランス語で記され、英語を含むさまざまな言語に訳されて１６世紀まで広く流通した、いわゆる『マンデヴィルの旅行記』において、古典文学の主題や視点がいかに受容され、中世後期の文脈において変容しているかを、詳細なモチーフ分析を鍵として論じた研究である。

論文は、序論と結論の他、５つの章から構成されている。

Introduction

Chapter 1　Observation, Allegory, and Marvel: The Descriptive Patterns for Motifs and their Appropriation from Classical Literature

Chapter 2　Traveller and Travels: The Structure of *Mandeville's Travel*

Chapter 3　Gold and Gems: Mineral Motifs in Natural or Artificial Surroundings

Chapter 4　Phoenix and Ants: Transformation and Variation in Animal Motifs

Chapter 5 Cynocephali and Pygmies: Reason and Monstrosity in Half-Human Motifs

Conclusion

BIBLIOGRAPHY

〈論文の概要〉

『マンデヴィルの旅行記』はジョン・マンデヴィルと名乗る虚構のイギリス人による聖地巡礼と東方旅行の記録であり、主に１５世紀の複数の中英語、フランス語の写本で現存している。本論文は、これらの諸版を比較しつつ、作品中に登場する古典起源のモチーフの古典古代から中世における変遷を辿ることで、その受容の特色を論じている。作品中の主要なモチーフに関して、『マンデヴィルの旅行記』が活用したと思われる典拠作品のみならず古典古代から中世にかけてラテン語、ギリシャ語、古英語などで残された多くの類例を集め、それらをひとつの文学伝統としてとらえて詳細に比較検討している。

本論文の主旨を示した Introduction に続いて、第１章では、中世における古典起源のモチーフの受容を、それぞれ「観察」、「寓意」、「驚異」と名付けた３つの記述のモードに分類して論じるという、本論文の方法論が示される。「観察」とは、古典起源のモチーフをテクスト中に記述するに際して、中世の著述家自身の解釈や価値判断を極力廃した情報の提示であり、主に百科事典的なテクストに見られるモードである。それに対して寓意は、モチーフを例話的に扱って、特にキリスト教道徳や教義に関連づけた解釈を行い、事象の隠された意味を読み解く手法である。驚異とは、非日常的で常識では計りきれない事象を扱うに際して、その異質性に対する感嘆あるいは畏怖の感情を前面に押し出した記述のモードである。驚異は、１３世紀初頭のティルベリのゲルバシウスが展開した驚異の定義を参考にして、キリスト教的な解読を伴う miracula（奇跡）と解釈無しに事象のみが提示されている mirabilia の２種類にさらに分類されている。

第２章は、『マンデヴィルの旅行記』が作品としていかなる構造を有しているかを分析している。この旅行記は、前半がエルサレム巡礼のための手引き書、後半が非キリスト教的な異世界への驚異の旅の記録と表面上２つに分かれており、中世の世界地図(mappa mundi)のような明確な対称性を有している。しかし、内容的には、後半にもキリスト教徒の読者への配慮が色濃く見られ、一方で巡礼地を巡る前半にもキリスト教信仰とは無縁な、道中の珍しい事象に関する記述が登場する。その意味で、全体的には、キリスト教的世界観のもとで様々な驚異を物語る書物と見なすことができる。しかし、中英語の諸版を比較すると、この構造も時に変化の対象となっていることがわかる。特

に２種類の韻文の版では、巡礼記と驚異の書という二重構造が崩壊しており、マンデヴィルという人物名も登場しない。こうした構造上の特色は、結果として各ヴァージョンにおいて古典受容のあり方を微妙に異なるものとしており、次章以降のモチーフ分析においてヴァージョン間の差異を具体的に論じる基盤となっている。

第３章から第５章まではそれぞれ、古典古代にまで遡れる個別のモチーフを対象として、第１章で提示された３種類の記述のモードに即してその中世における受容を論じている。

第３章は、黄金と宝石に代表される鉱物のモチーフを扱い、このモチーフが中世においては、テクストの機能に対応するかたちで３種類全てのモードで記述されていることを、プリニウス以降の様々な具体例とともに示している。つまり、ヴァンサン・ド・ボーヴェなどの百科事典では体系的に色や効力を記述する「観察」の手法が用いられるが、一方で、黄金や宝石を人間の貪欲の元凶、あるいは逆に神の栄光の象徴と「寓意化」して記述する例も存在する。最も一般的な記述は、西洋では希少価値の高い宝石や黄金が東洋では大量に産出するという点を強調し、キリスト教的価値判断を下すことなく異教的要素を描く「驚異」の手法である。『マンデヴィルの旅行記』ではこれら３つ全てのモードがこのモチーフをめぐって用いられているが、なかでも驚異として記述する例が顕著であることが比較を通じて示される。

第４章の対象は不死鳥（フェニックス）と蟻だが、両者はそれぞれ古典まで遡る長い描写の伝統を持っており、そこでは３つのモードが複雑に交差している。フェニックスの場合、当初は東洋の驚異として、あるいは客観的観察の対象として描かれることが一般的で、後にキリストの復活と結びつけられて寓意化されることが増えた。古典文学の蟻のモチーフには、通常の蟻と、黄金を掘り出してそれを人間による盗難から守っている東洋の怪物蟻の２種類が存在する。中世では通常の蟻が観察あるいは寓意化の対象となっているのに対して、怪物蟻は中世を通じて驚異として記述される。『マンデヴィルの旅行記』にはフェニックスと怪物蟻の両方が登場するが、両者とも驚異として記述されることが多いという特徴がある。特にフェニックスの場合は、寓意化されるよりも、その姿の美しさなどを驚異としてとらえ、語り手の実際の見聞により強調する記述になっており、寓意によるキリスト教化は意図的に抑えられている。

第５章は、犬の頭を持つ犬頭族とピグミー族を扱うが、これらのモチーフは、その造形の人間への類似性故に、中世では複雑な伝統を持っている。これらの種族が人間か否かについては、アウグスティヌスをはじめとして中世の神学的著作で繰り返し取り上げられた問題であり、その議論の方向性は、こうした種族の存在は神の奇跡なのか、それとも自然の法則から逸脱した結果なのかという、驚異の性質とも関連してくる。実際の記述においては、その非日常性を強調して「驚異」として描く場合と、彼らの姿や風習を淡々と記述する「観察」の両方のモードが見られ、実際、古典古代においては、両種族ともに、外見の奇異さにもかかわらず理性を備えた存在として「観察」されている場

合が多い。一方で中世になると彼らの驚異性が強調されて、特に犬頭族は凶暴で人を食べる怪物として描かれ、恐怖や驚きが喚起されている。『マンデヴィルの旅行記』における記述は３種類のモードが入り交じった複雑なもので、特に犬頭族の記述は本論文が取り上げているいかなるモチーフよりも複雑である。その姿が客観的に観察される一方で、人食の習慣はその残酷さに対する驚きとともに描かれ、さらに、彼らの宗教的風習がキリスト教徒のそれに擬せられる記述には若干の寓意化も認められる。３種類のモードのどれが優勢かは、中英語のヴァージョンによっても違いがある。ピグミー族のモチーフにおいても、古典のモチーフを驚異として受け継ぐ一方でキリスト教的な寓意化もなされており、この描写の複雑さは、『マンデヴィルの旅行記』の典拠である１３世紀末のポルデノーネのオドリコの旅行記と比べると一層顕著である。

以上のモチーフ分析を通じて、『マンデヴィルの旅行記』においては観察、寓意、驚異の３種類の記述のモードの全てが認められるが、古典起源のモチーフに限っては、分析した全てのモチーフに驚異の手法が共通して用いられている反面、キリスト教的な寓意化は限定的にしか認められないという特徴が明らかになる。その結果をふまえて、本論文は、『マンデヴィルの旅行記』は古典テクストから受け継いだ記述を中世のキリスト教的文脈の中にあからさまに取り込むことなく、むしろその驚異性を強調する記述を選択することで、異教の文脈で誕生した古典作品の異質性を尊重する描写を展開することに成功していると結論づける。そして、そのような受容を可能にしているのは、まさに『マンデヴィルの旅行記』の旅行記としての構造と、記述に対して一定の距離をとり続けることが可能な虚構の語り手の存在であると指摘する。

〈審査の要旨〉

以下、マンデヴィル研究の第一人者である副査のヒギンズ教授から郵送された詳細な審査報告と、2009 年 1 月 14 日に行った口頭試問の質疑応答もふまえつつ、審査委員会の所見を要約する。

『マンデヴィルの旅行記』に関する研究は数多いが、これまでの研究は、２０世紀に展開された写本や典拠作品の研究をはじめとして、近年では中世のキリスト教的地理観との関連、同時代及び近代初期における受容などに注目するものが多く、古典の受容に注目して全体を論じた研究は存在しない。本論は単なるソース研究に陥ることなく、モチーフ分析により、古典起源のモチーフの記述のなかに３種類の受容のパターンを識別することに成功している。それは何よりも、大沼君がラテン語、ギリシャ語、古英語、中英語などで記された古代から中世にかけての数多くの原典を詳細に調査して比較可能な類例を集積した結果であり、その原典の読みとモチーフ分析の厳密さは高く評価できる。個々のモチーフを比較することで、そこに中世において意図的に継承されたひとつの文学伝統を見出し、類別可能な３種類の記述モードの存在へと至る議論の流

れは明晰に示されていて説得力がある。本論の方法論的な独創性は、この観察、寓意、驚異という分類にあるが、なかでも驚異をひとつの記述のモードとしてとらえた視点は高く評価できる。特に、le Goff や Greenblatt などの先行研究を参考にしつつも、現代批評における同種の概念を援用するのではなく、ティルベリのゲルバシウスなど中世の著述家のテクストに見出される同時代の定義に基づいて議論を進めている点は重要であり、『マンデヴィルの旅行記』研究のみならず広く西洋中世のナラティブを論じる上での貴重な視点を提示している。

モチーフ分析の方法論としての有効性は、対象となるモチーフがそのテクスト中で担っている役割、さらにはテクストを取り囲む同時代の文化的文脈のなかでの意義に左右されるが、本論におけるモチーフの選択はその意味で適切である。全体で６つの古典起源のモチーフを鉱物、動物、人間の３種類に分類して扱うことで、１３世紀にヴァンサン・ド・ボーヴェが編纂した百科事典『知識宝鑑』の構造に即するかたちで、バランス良く中世の世界像を反映した選択になっていると言える。選択されたモチーフはいずれも、詳細な分析によって差異を浮き彫りにすることが出来る十分な長さを備えており、本論文は、原則としてキリスト教的世界観と抵触しない鉱物のモチーフから始めて、動物のモチーフを経て、記述が被造物としての人間の神学的定義と関わらざるをえない、より複雑な犬頭族やピグミー族の例へと議論と分析を深めてゆく。個々のモチーフの分析が正確であることに加えて、このモチーフ選択と構成の巧みさが議論の客観性を高めることに寄与していると言えよう。

こうしたモチーフ分析によって、『マンデヴィルの旅行記』が古典古代から継承されてきたモチーフに対して驚異を前面に押し出す記述法を意図的に採用することで、その起源を尊重する扱いをしていることが的確に例証されているが、本論文は、１５世紀に制作された中英語の写本間の異同をさらに分析することで、写本間の視点の微妙な差異も指摘し、議論に深みを与えている。

こうした点全てを考慮して、大沼論文は、『マンデヴィルの旅行記』における古典の受容に本格的に取り組んだ世界初の論考であり、議論を通じて導き出された驚異の記述モードは、マンデヴィル研究のみならず、中世イギリス文学研究全体にとっても貴重な貢献であると高く評価できる。

その一方で、本論文は今後の課題として考えるべき点をいくつか抱えている事も事実である。古典受容における３種類のモードは、本論の独創的な長所であるが故にさらなる検討に値する。『マンデヴィルの旅行記』における古典受容を独自なものとして際だたせるには、他のテクストにおける同じモチーフとの比較にとどまらず、古典起源ではないモチーフについてはどのような記述がされているのか比較する必要がある。また、筆者は百科事典、動物譜、例話、ロマンスなど様々なジャンルのテクストに登場するモチーフを比較しているが、

テクストのジャンルや機能の違いを十分に考慮していない。こうしたより広い文脈からの議論があれば、本論の方法論的前提はより堅牢なものとなったであろう。

また、３０以上の中英語の写本で現存する『マンデヴィルの旅行記』を研究するに際して、写本間の異同や個々の写本の編集方針に注目しないわけにはいかない。筆者は、複数の写本において『マンデヴィルの旅行記』が１４世紀のヴィジョン『農夫ピアズ』と共起することなど、写本のコンテクストに関していくつかの興味深い指摘をしているが、写本間の比較にはより多くの可能性が残されている。特に、中世語の方言アトラスを用いて、写字生の言語的特徴を比較することで写本毎の記述の違いについてさらなる分析が可能となったと思われる。

以上のように若干の課題が残されたが、それらは本論文の視点の独創性と議論の深みを損なうものではない。本論が描き出した『マンデヴィルの旅行記』における古典受容の図式は、中世における古典受容を考える上でひとつの具体的な視点を提示することに成功しており、中世研究への貴重な貢献であると評価できる。かくして審査委員会一同は、大沼由布君の博士号請求論文を、博士号（文学）を授与されるに相応しい論文であると判断する。

（文責　松田隆美）